

機に恵れる事がなかつた、とするのである。

以上は菊版七百頁に亙る大著、寧樂佛教史論の中に展開されてゐる論理の簡単な紹介に過ぎない。著者は上述の様な寧樂佛教の發展過程の中に特に推古と天平と鎌倉の三大精華を見出し、これこそ絶えず大陸文化と密接な關係を保ちつゝも尙それ等を日本の形態に於て發展せしめた所の所謂寧樂佛教の本質である事を言つて居る(第六章)。併し著者の到達した此の様な結論は決して單に抽象された簡単な論理の歸結ではなく、其處には著者が永年此の領域の開拓に傾注した深い體驗が偲ばれるのである。事實本書に於ては龐大な和漢の文獻が引用され、あく迄嚴密な實證が論理の構造を支へてゐる。我々は此の點に、寧樂佛教史論に於ける第二の價値を見出す事が出来るであらう。實證と文化史的理解の綜合は著者が研究の方法に就いて省た態度であるが(序文)かゝる著者の意圖は本書に於てその大半を果し得たと言ひ得るであらう。勿論多少の難點に就いて、例へば天平に於ける佛教文化の成立がどの様な歴史的必然に於て行はれたか、或は又鎌倉初期に復活した寧樂佛教の衰亡に就いて「論議の弊」「密教化」「大陸に於ける佛教の衰退」の如き佛教自體に關する精神的なる者を強調し過ぎた感のある點等一二の不満を數へ得るであらうが、併し本書の如き寧樂の教團と教學の發展を一般歴史の經過の中に綜合し得た高き境地は、著者にして初めて爲し得る所であると言ふ事が出来る。

尙本書は文獻の博引と問題の複雑性に於て多少難解の感はあるが、反復執讀する事によつて自ら著者の意圖が感得されるであら

第二十三卷 第三號 五九四
うと思ふ。(東方文獻刊行會發行、定價七・〇〇)(内藤晃)

豊大閣眞蹟集 解説共 三册映入

東京帝國大學史料編纂所編

豊公が卑賤より身を起して終生無學であつたことは、醜嘲の醜の字を失念せる右筆に對し、かくの如く書くべしとて大の字を書示したといふ老人雑話に見ゆる有名な話柄によつて廣く喧傳せられてゐるが、その眞蹟の今日に遺るものは意外に多く、近年大阪城天主閣に於ける數次の特別展觀に際しては殆ど毎回從來學界に多く知られなかつた新しい眞蹟の出陳せらるゝものがあつて人々を驚かせたことであつた。我々はそれらのものに接する毎にその眞情流露、磊落にして然もよく念のとゞきたるところ、眞に豊公その人に面接する思ひあるを見、それらが恐らく公の在世の當時より特に愛惜珍重せられて永く今日に傳はるに至つたことの眞にむべなるを知ると共に、我々も亦之を單に一回の展觀に終らしめず、出来ればそのすべてを影印にとゞめて之を座右におきたいと思ふ慾望の切なるものがあつた。當時展觀當事者にあつても亦その意圖あつた由であるが、早く史料編纂所に於て同種の企あるを知つて之を中止せられたかにも聞いてゐる。爾來我々は多年この書の出現を偏に期待してゐたのであるが、同編纂所にあつてはこれが編輯に特に慎重なる態度を以てし、眞偽の判定に過誤なきこと、傳存のものを網羅して遺漏なからんことを期せられ漸く今日に至つてその大成を見たのである。

今、就て見るに縦一尺三寸五分、横一尺、大和綴帖仕立、上下二冊の外、別に解説一冊を添へて之を帙に收めてゐる。寫眞は概ね四切版を用ひ、特に大なるものは二頁以上の折込としてゐるので殆ど實大に近く、コロタイプ製版も極めて鮮明にしてほゞ間然するところが無い。而して收むるところは豊公自筆に係る消息、和歌道具目録、米錢切符等約百二十點の外、別に于秀頼、正室杉原氏、側室淺井氏等各自筆の消息約百點、就中見るべきは言ふまでもなく豊公自筆の消息類である。總數斷簡をも加へて約七十通、その最も早きは公爵徳川閑順氏所藏元龜元年十二月廿七日附蜂須賀正勝宛のものとし、最後のものは多田厚隆氏所藏某宛消息の慶長三年六月十七日、正に薨去前二箇月に當り、或はその絶筆とも推せられるものに及んでゐる。而してそれらの中妙滿寺所藏杉原氏宛消息の、天正十五年漸く九州を平定したるのみにて未だ關東へも及ばざるに早くも朝鮮征伐の意圖あるを告げ、同時に自らの白髮の増したるを訴へたる、また妙法院所藏生母天瑞院宛のものが、小田原陣中の模様を報ずると共に遊山をして老を忘れんことを勧めたる、或は更に水野英一郎氏藏淀殿宛消息の鶴松の成育を氣遣ひ淀君愛撫の眞情を流露して修飾の態なき、その他米澤元健氏所藏杉原氏宛のもの、馬越恭平氏所藏秀頼宛のもの等の晩年にして儲けたる幼兒に對し夜鶴の情述べて餘すところなき、いづれも皆既に世に著聞するものであるが幾度見ても紙面に溢れた衷情の美しさ、素直さに心うたれるものがある。比較的新しく知らるゝものとしては近時大阪市の所藏に歸した秀頼宛消息の、その意に違

へる侍女を處分することを約してその機嫌取りをせるもの、或は公爵毛利元昭氏所藏の同じく秀頼宛消息が自ら「と」と署名して昨日別れたばかりのゆかしさに折物にそへて送れるものなど、共に最も興味あるものである。

尙附録として添へられた秀頼以下の眞蹟の中では五歳頃より天神號、豊國大明神號等を書き習つてゐた秀頼が手蹟著しく進歩して十一歳にして保坂潤治氏所藏七つ伊呂波の如きものを書き遺すに至つたその間の経過が歴々指摘しえられる如き別箇の興味もあり、この種の寫眞集の古筆鑑定の上に有つ審判の大きなるを思ひ、直接編輯解説のことに當たられた人々の勞に感謝したい。(東京帝國大學史料編纂所發行、定價六〇・〇〇)(柴田)

山崎闇齋全集 全五卷

日本古典學會編

目次

垂加草全集(文會筆錄)

垂加文集、同續、同拾遺

風葉集

風水草

編纂書

肖像

筆蹟

表章書